曇り空の道

串田孫一

曇り空の道

串田孫一

青娥書房

曇り空の道

著者　串田孫一

発行者　加清　蘭

印刷　壮光舎印刷株式会社

製本　土開製本株式会社

発行所　青娥書房

東京都千代田区三崎町三―一―一
電話東京(二六四)二〇二三振替東京二一四〇〇

検印廃止

1092―11040―3972

曇り空の道　目次

＊

人生の区切について　6

秘密について　15

心の乱れについて　18

行動の半径について　21

余裕について　24

余暇について　28

変ることと変らないことについて　31

心の貧しさについて　35

巡りあいについて　38

老いについて　42

占いについて　47

遊びについて　50

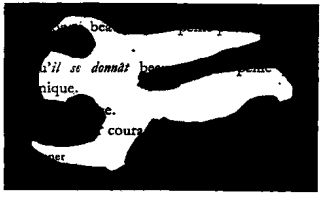
約束について 52
＊
色紙と名言 56
教えて学ぶ 58
読書と公害 60
神の失敗 62
人生の雑草 64
死者の供養 66
笑いの味 68
旅行の用心 70
生活の眼 72
思いあがり 74
美に酔う心 76
虚仮(こけ)の行 78
＊
金次郎の後姿 82
子供言葉 83

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

黙って読む　85
気に入った絵　87
別れ際に　88
改まった挨拶　90
叱ることと怒ること　92
食卓に着いて　93
電報　95
簡潔　97
明日のための眠り　98
合歓の花　100
ダイヤモンド　102
大いなる目覚め　104
お喋りの中の真実　106
少年を失望させた大人　107
虹の手紙　109
＊
富士山　112

信越の四季　125
北アルプス　138
東山三十六峰　152
上高地・上荒地　164
南伊豆　170
＊
再びラヴィーニュの楽譜　178
懐胎の悦び　187
独占の欲　196
楽しみの尺度　204
標題への意識　213
遠い日の憧れ　222
＊
あとがき　231

装幀　串田孫一



人生の区切について

私は駅のプラットホームが好きである。

ホームの椅子に腰かけてぼんやりしているのが好きだ。この頃は大部分が一人一人掛ける洒落た椅子になってしまったが、ほんとうは古ぼけた木のベンチの方がいい。多少脚がぐらついていても、その方が落ち付いて休むことができる。冬の風の強い日は外套の襟に首を縮め、夏は幾分行儀悪くげんなりとして風を待つ。それは楽しみというより、冷房暖房のついた建物の中よりは遙かに気分がいいからである。

都会の駅のホームにいる時、たとえば一人の、ややこわばった姿の男の人を、二十人ばかりの似たような人が取り囲んでいることがある。どこかの会社の、転勤になる同僚を見送っているのだろう。そうかと思うと、二人のそわそわした気持を懸命に隠そうとしている男女を、着飾った連中が囲んで、冗談を言ったりからかったりして送っている。結婚式を済ませ、披露宴があり、新婚旅行に立って行くのだろう。

駅や飛行場にはこうした人の群が毎日毎日幾組も見られる。そしてその多くは少なくもはたから眺めていれば賑かに祝福されている。しかし時たま、送る方も送られる方もふさぎ込み、寂し

さを隠し切れない表情で列車の窓の内と外で下を向いている人を見かけることもある。望みをすっかり失い、疲れ果てた心身をやすめるために、一度出て来た都会から故郷へと戻って行く人かも知れない。旅立って行く人も一人、送る方もたった一人。それは辛い別れの時かも知れない。

人間の運命は、なんとなく見えるようで誰にも見えない。それが駅のようなところでは錯綜しているに相違ない。

*

こういう宿命的な人間の動きとは別に、空の彼方に何かを想い描いて、そこへ向って行く心と、その弾みを考えている。

かつて私にも、誘いを烈しく感じて立ちあがり、一つの輝かしい目標へと向って歩いて行かなければならないと思ったことがあった。そしてそういう時には蜃気楼でも見ているように、自分の未来が鮮明に見えるのだった。遠方まで見渡せる自分の未来への道がそれ以外にはないと定った時、過去や周囲に繋がっているものを思い切りよく断ち切り、忘れてしまわなければならないと思った。現在のすべての条件を棄て去ることは不可能であろうが、それを仮りに棄て切れたとして、新しく築かれる未来への道は、どんなにか自由で活気に満ち、ひろびろとしているものに思われたことだろう。

そういう時に、当然のこととして第一歩を踏み出せる人を私は羨しく思った。この人こそ旅立

つ人だと思った。躊躇がないのは、勇気に伴う知恵があるからで、決して最初から賭けるつもりで歩き出したりはしない。自分の心にかけ声はかけているのだろうが、そういう人の行動には気張ったところもなく、すべて事もなげに歩いている。

しかしそれがどうしてもできない人がいる。一体何を躊躇しているのだろう。自分の今の存在の条件を全く省みることもなく、ただ夢みる未来があまり鮮やかに浮び上って来たため、それに心を牽かれて歩き出すのは、たしかに無謀であり、思慮が浅すぎる。そしてまたある人はこうも言うかも知れない。君の現在を支えているすべてのものを棄ててもいいと思っているのか。それらに恩を感じていない筈もないのに、忘恩者としての自分を咎める気持はないのか。

無謀かもしれない。忘恩と言えば、それもそうかも知れない。しかし、それらを離れて考えることがあってもいい時がある。現在の諸条件には存在や生活を一応安定させるものもあるには違いないが、それにのみこだわるのは、しばしば自分をがんじがらめにしてしまう結果を呼ぶだろう。思慮のない行為をすすめたりするのではない。忘恩をたたえるのでもない。だが、素晴らしい出発を夢みる者を最も強くひきとめているものは、実は外にあるのではなく、それらの人の内部にひそんでいる乱れ勝ちな考えであることに気がつく時があってもいいと思う。

*

巣立つ小鳥の翼のように軽ろやかに、明るく羽搏いて……。それは分っていても、そんな思い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

切った行動がどうしても自分にはできない。今の自分の頭を占領しているこれほど多くのものを、一体どうやったら棄ててしまえるのだろうか。

実を言えば、私自身も全くその通りだった。屈託なく行動する人たちを羨んでいるあいだに、また自分のためらいを、ただ意気地のないことだと嘆いているあいだに、自分を支えているものにこちらから甘えている気持を整理しておけなかったのだろうか。

新たな出発のために、明日がより自由であるために、整理するものは意外に多い。自分がかかえ込んでいる不要なものがどれほど多いかに改めて気付き、その整理の手筈を考える。取りのぞいてはならない条件を、見さかいなく破り棄てようというのは狂気である。夢みる世界が、そこに身を投じ込むことで、その瞬間からひらけるわけのものでもない。

*

理想と現実とのあいだにはさまれて苦しみ迷う人はいつの時代にも多いと思う。というよりこの苦悩を知るのが人間である。進歩を可能にしているのも、常に発見が期待されているのも、理想や夢を現実との関係で描いているからであろう。そして、その迷いや苦悩を訴えずにはいられない。だがある人たちは、苦しんでいることに意識が向い過ぎてしまって理想も夢も朧ろに薄れ、理想や夢はその人にとって、苦しみに自分を追い込んで行く手段であったようにしか思えない。

その日その日は、どんな人にとっても、正しい理想へ向っての、あるいは未来の明るさを曇らせないための、真摯な努力でなくてはならない。

数ある人間の中には、苦悩を目的として、そこに何かを求めている人がいても構わない。ただその人たちが、こんなにも苦しんでいる、こんなにも憂いの多い日が続いていると訴えられると、勝手な人だと思う。悪い趣味だと思う。自分から求めていながら、告白をしたり、妙に恨めしいような訴え方をするのは、一種の偏執狂であろうが、そういう人がふえるのは恐ろしい。それで私は、時々、さばさばしようではないか、晴ればれとしようではないかと声をかけたくなる。そしてまた、未来がいつも私たちの目指すところなのだから、わざわざ重く足を引きずって行くよりは、足取りを軽く、快くするように心がけようではないかと言ってみたくなる。

もっともそこまで実際に言えないのは、私自身にもそう言われても仕方がないようなところが少しはあるのを承知しているためかも知れない。

*

私は何年か前に、船で外国へ向う青年を送ったことがある。飛行機を使わなかったのは恐らく経済的な理由もあったろうが、船で語学の勉強だの、いろいろ前もってしなければならない予定があったからだ。私はこの時ばかりはどうしても桟橋に立ち、港を出て行く船に向って手を振りたかった。

その頃私は、依頼があるとよく講演を引き受けていて、その日も少し遠方の高等学校へ出かけて行く約束があった。学校であるから学内の予定を狂わせても、一般の公開講演とちがって何とか私の我儘な願いを入れてくれるかも知れないと考えて交渉し、延期をさせてもらえるという返事を得たので早朝に家を出て、彼の乗って行く船のとまっている港へと急いだ。その時ほど見送りの意味を感じたことはなかった。

なかば義理で、厄介な習慣があるものだと思いながら顔を出すような見送りであるのならば、それは送らない方がいい。賑やかな雰囲気をよろこぶ人たちの出発は、自分が行ったところで後の方に小さくなっているだけで、大して賑わいを増すことにもならないので失礼させてもらうが、この青年を送る人は、私のほかには誰もいなかった。その数日前に、わざわざ私のところへ挨拶に来てくれた時、彼は送るものはいないだろうと言い、それならそれで却っていいとも言っていたが、それでは余り寂しすぎる旅立ちだと思い、私は約束のある学校の方に都合をつけてもらって、港へ行った。

彼がすでに乗船している貨物船は大きかった。塗りかえたばかりの薄緑色の船体が実に大きかった。そして早朝からはじめていたらしい最後の積荷がもうほとんど終っていて、あまりごったがえしてはいなかった。私は桟橋のコンクリートの壁に沿ってゆっくり歩きながら、これなら必ず彼の姿をさがせると思った。

青年は多分自分で誂えてつくった新しい洋服にきちんとネクタイをつけ、甲板の手すりに凭れ

て、遠くの方をじっと見ている顔つきであった。私がその真下へ行くと彼は静かに片手をあげ、にこやかに挨拶をした。そしてその場所を両方とも動かなかったし、少し声を大きくすれば十分に話のできる距離であったが、何も喋らなかった。こんな時に、普通ならば何か喋らないとおかしいものだが、無理に話すようなこともなく、目をそらして別々に、その場には無関係なことを考えたりした。

数日前に訪ねてくれた時に、もうこのまま帰らないだろうと言っていた。そして私も別段それに反対する意見もなかったが、こうして無言で、桟橋と船の甲板とで向い合っていると、私の方はそのことが頻りに想い出された。帰って来ればいいのにとは思わなかったが、再び帰らないと決めている彼の、この国を離れて行く気持を私は仮りに自分に移して、胸の詰まるような気持を味っているのだった。

何年かのあいだ、黙ってひとりで立てたこの計画は、決して気紛れなものでもなく、追い詰められたものでもなかった。彼の顔の表情には明るさもあり、平静な姿であった。

軈て出帆の時刻が来て、桟橋をゆっくり離れて行く船を、最初はそろそろと歩き、次第に走るようにして追いながら、桟橋の先端まで行って手を振りあいながら別れた。

*

今こんな一つの経験を想い出しながら、私はこれまでに何か新しい出発に際して送られたこと

の方が多いか、それとも人を送った数の方が多かったかを考えるが、それは考えても何の役にも立たない。

人生は、振りかえってみて、なんとなく続いているようにも思えるが、またその焦点の合わせ方によると、大小の区切が沢山あったとも言える。私はちょうど今届いた郵便の中から一冊の画集の小包を解いた。

一度も面識のないこの画家はかなり著名であるが、その人がどういう経歴かを十分知らなかったので、その本のうしろに二頁に亘って載っている略歴を見た。略歴とは書いてあるがかなり詳しいもので、外国での長い滞在が幾度かあり、職も変わり、考え方の変化にも及ぶ出来事との出合いも記されていた。その画家の作品をよく理解する上では、恐らく大切な事柄だと思われた。

それに比べると、私などは平凡で、別段珍らしい体験もしていない。だがその起伏のない人生でありながら、区切はいろいろあった。その多くは外部からの力によるものであったり、習慣によるものであったり、あるいは他人のすすめに応じたもので、自分の意志によったというものは、案外少ないかも知れない。

だがそれは考え方次第で、他人からすすめられたことであっても、それに応じるように決めたのは自分であるし、習慣によると言っても、従うことにしようと決めたのはやはり自分であった。その間に短時間ではあったが迷いの時があった。

ただ大切なのは、その区切をどう活かすかという、その構え方だと思う。

かつて私は、人生の抑揚などという文章をあれこれ書いた記憶があるが、言葉にアクセントがなければ、耳に入っても、心が伝わりにくいように、人生にもそれがないと眠るような生活に終る。そしてその抑揚を巧みに使い、利用して、家にいながら新しい出発の気持を静かに味うのは決して愚かだとは言えないように思う。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo